

令和5年度第1回長野県観光振興財源検討部会 議事録

日 時：令和5年(2023年)10月6日(金)
午後3:00～午後5:00

場 所：県庁議会増築棟 404・405 会議室

※WEB会議システムを併用

出席者：委員 金澤 武彦

委員 小林 史成

委員 神野 直彦

会長 峯村 勝盛

委員 森 晃

委員 矢ヶ崎 紀子

欠席者：委員 金子 ゆかり

委員 山田 雄一

事務局：観光部長 金井 伸樹

観光部次長 丸山 祐子

山岳高原観光課長 小林 伸行

1 開会

<丸山次長>

定刻となりましたので、ただ今から第1回長野県観光振興財源検討部会を開催いたします。

私は進行を務めます事務局の長野県観光部次長の丸山でございます。よろしくお願いたします。

本部会の委員はお手元に配布の名簿のとおり8名の皆様です。紹介は省略いたしますので、ご確認をお願いします。

なお、金子委員及び山田委員は所用のため欠席の連絡をいただいております。また、矢ヶ崎委員はオンラインでの参加でございます。

本日の会議はオンラインとの併用開催ですので、ご発言の際には、最初にお名前をおっしゃっていただき、会場の委員の方はマイクに向かって大きな声で発言くださるようお願いいたします。また、部会は公開で行い、資料と議事録は後日県ホームページに掲載いたしますので、予めご承知ください。

それでは、開会に当たり、観光部長の金井伸樹から挨拶を申し上げます。

<金井部長>

皆様方こんにちは。観光部長の金井でございます。

本日は大変お忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます。

本日、新たな観光振興財源の検討を行うために皆様方にお集まりいただき、観光振興審議会に設置した部会としてこれから皆様方に財源の検討をいただくことになっております。よろしくお願いいたします。

新たな観光振興財源の検討につきましては、昨年度県庁内にプロジェクトチームを設け、観光振興政策や他の自治体の自主財源確保策の取り組み例、負担の対象となる観光客の観光行動について、研究・整理をしたところでございます。

この研究結果については本日ご説明する予定でございしますが、更なる検討には有識者等によるオープンな場での検討が必要という認識に至り、7月27日に開催された観光振興審議会に対し、知事から「新たな観光振興財源の検討について」諮問があり、審議会におきまして検討の場として設置され、本日はそれに基づいて皆様方にお集まりいただき、これから議論を進めていただくということになっております。本日はその1回目ということでございます。

長野県観光の現状や課題、県が取り組んできた施策の状況など、長野県が置かれています現状について皆様方と共有させていただき、今後の観光振興施策の方向性や、それらに取り組むための財源の必要性などにつきまして委員の皆様からご意見をいただきたいと考えております。

検討部会は今回を含めて4回開催予定しております。皆様方のご意見を踏まえつつ、事業者を含む関係者の皆様方にも幅広くお話をしながら検討を進めいき、観光振興財源の姿を皆様方のご協力で取りまとめていただければありがたいと考えております。

私からのお話は以上でございます。よろしくお願いいたします。

2 会議事項

(1) 部会長の選出及び会議の公開について

<丸山次長>

ありがとうございました。

次にお手元に配布しております長野県観光振興審議会組織運営要綱第3項の規定により、部会長は部会に属する委員が互選することとなっております。ご意見のある委員は挙手をお願いします。

<金澤委員>

はい、金澤です。事務局の方で案があればお示しいただければと思います。

<丸山次長>

その他の委員の皆様はいかがでしょう。

(「異議なし」の声)

<丸山次長>

それでは事務局の方からお願いします。

<小林課長>

事務局を務めております観光部山岳高原観光課長の小林です。

事務局といたしましては、財政学のご専門家であり、地方自治体の政策また税財政について豊富な知識とご経験をお持ちであり、福岡県における観光振興財源検討会議の座長も務められておりました神野委員を、部会長にお願いしたいと思っております。

<丸山次長>

ただ今、事務局から神野委員を推薦する案が提案されました。委員の皆様いかがでございますでしょうか。

(「異議なし」の声)

<丸山次長>

ありがとうございます。皆様からご了承いただきましたが、神野委員、部会長をお願いできますでしょうか。

<神野委員>

承ります。

<丸山次長>

ありがとうございます。それでは神野委員、部会長のお席にご移動いただき、一言お願いできればと思います。

<神野部会長>

部会長の職務をご指名いただきました神野でございます。よろしく願いいたします。

私は、阿部知事と長い間懇意にしており委員を引き受けたところで、また今日部会長にご指名いただきました。スムーズに議事を進められればというふうに思っております。

事前にお断りしておかなくてはいけないのは、私は網膜剥離を患っております、42歳の時から光を目に入れることができず、テレビを見たこともなければ、パソコンを操作したこともありません。手術を繰り返しながら失明を避けておりますので、眼鏡を外すと50センチに焦点が合い、眼鏡を掛けると10メートルに焦点が飛ぶため、頻繁に眼鏡のかけ外しを行いお見受け苦しい事もあるかと思いますが、ご寛容いただければと存じます。

さらに今度の誕生日で78歳となり、生まれて初めて齢を取るっていう経験をしているので戸惑うことばかりでございます。委員の皆様方さらには事務局の皆様方のご協力を得て、どうか職務をつつがなくこなせるように務めてまいりたいと思っております。よろしく願いいたします。

さきに申し上げたいのですが、観光の「観」は、悟りを開くという意味で、「光」は希望を意味します。希望を見て悟りを開くということが観光の元々の意味ですので、こ

の豊かな自然環境に囲まれて、長い年月をかけて長野県の人々が培ってきた社会環境、人間と人間との繋がり、こういったことを未来へ向かって発展させていくってということ、両立するような形でこの問題を考えていきたいと思っておりますので、よろしくご指導いただければと思います。

<丸山次長>

ありがとうございました。それでは審議会要綱第3、第4項の規定によりまして、これ以降の進行は神野部会長にお願いすることといたします。神野部会長よろしくお願います。

<神野部会長>

それでは議事の方に入らせていただきたいと思います。議事に入る前に第1回目の会合でございますので、それぞれの委員の皆様方から、自己紹介を頂戴できれば思っています。名簿順で恐縮ですが金澤委員からお願いできますでしょうか。

<金澤委員>

金澤武彦と申します。長野県索道事業者協議会というスキー場の集まりの団体を代表してこの会議に出させていただきます。白馬村に20数年住み今は佐久市にいます。

今の会社のスキー場は蓼科町にあり、指定管理で運営をやらせていただいています。それ以外に関連会社で安曇野ワイナリーもあり、一貫して学生の頃から観光リゾートに関ってきた経歴です。この場で出身は関係ないかもしれませんが、大阪出身ため関西系の意見が入るかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

<神野部会長>

どうもありがとうございました。引き続き小林委員お願いできますでしょうか。

<小林委員>

皆さんこんにちは。アルピコ交通の小林史成と申します。観光関連事業のうち交通関係としての出席となります。出身は松本市で、アルピコ交通に入社し、今はアルピコ交通の社長という立場が3年目になります。それ以前は、アルピコホテルズで6年ほど社長を務めておりました。地元のお客様だけでなく、観光のお客様も多く利用されますので、今回そんな視点から審議会委員と務めさせていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

<神野部会長>

ありがとうございます。それでは峯村委員お願いいたします。

<峯村委員>

こんにちは。峯村勝盛と申します。私は飯綱町の町長ではありますが、町村会の産業経済部の代表として出席させていただいております。

野沢温泉村から森氏もいらっしゃっておりますが、町村会には白馬村含め山ノ内町など観光に深く関わっている町村も多いので、この会に積極的に参画させていただいて、町村それぞれのご意見を反映していきたいと思っております。

個人的に言えば神野先生の『「分かち合い」の経済学』という書を拝読しており、行政を担う上で本当に何回も読み直しておりますので、今日をご本人にお会いでき、お話できるような夢のような一日でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

<神野部会長>

恐縮でございます。寛大なお言葉をいただきました。恐縮しております。それでは森委員お願いできますでしょうか。

<森委員>

長野県旅館ホテル組合会から参りました森晃と申します。旅館ホテル組合会では経営委員会の委員長をしております。

また、全国の旅館ホテル組合会の方でも観光立国推進委員会という、同じように全国の観光税、宿泊税をテーマに扱う委員会の委員長もしております。

神野先生は福岡県の検討委員会を務まれたということですが、全国の旅館ホテル組合会の会長は福岡県の旅館ホテル組合会の会長が務められており、福岡県の現状について議論をしてからこの場に臨んで参りました。よろしくお願いいたします。

<神野部会長>

つづいて、オンラインで参加をいただいております矢ヶ崎委員お願いします。

<矢ヶ崎委員>

オンライン参加にて失礼いたします。東京女子大学の矢ヶ崎と申します。

私も神野先生の財政学の書籍を読んで勉強をして参ったものですので、ぜひリアル参加をして先生のお側でお話してみたいと思っておりますので、また次の機会にお願いいたします。

私は観光学、特に観光政策を専門としておりまして、財源の関係でいいますと京都市と金沢市、こちらの財源検討、宿泊税検討等に関わらせていただいた経験がございます。

長野県にとってよい検討内容になっていくように尽力いたしますのでどうぞよろしくお願いいたします。

<神野部会長>

ありがとうございます、よろしくお願いいたします。

金子委員、山田委員はご欠席とのことでございますので、議事の方に入らせていただきたいと思います。

お手元の議事次第をご参照ください。会議事項(1)の部会長の選出は終わっておりますので、会議の公開について事務局からご説明いただければと思います。

<小林課長>

それでは【資料1】傍聴要領についてお諮りをいたします。

本会議は長野県附属機関条例第7条に基づきまして、長野県観光振興審議会に設置された観光振興財源検討部会であり、部会の公開につきましても付属機関条例、審議会等の設置及び運営に関する指針に則って対応することとしたいと思っております。

審議会等の運営につきましても会議の公開に関する定めにつきまして会議は原則公開にすること、当日は傍聴席等を設けると共に会議前のプレスリリースや会議後の議事録及び資料公表を一定期間のうちに行うこととされております。

また長野県情報公開条例第7条各号に定める非公開情報を審議または会議を公開することにより、公正かつ円滑な審議に著しい支障があるとなると認める場合には部会長が会議に諮って非公開にすることは可能になっています。

以上の規定を踏まえまして【資料1】傍聴要領を事務局にて策定したところでございます。この案についてこのような形でよろしいかお諮りをよろしくお願いいたします。

<神野会長>

はい、ありがとうございます。ただいま事務局から会議の公開についての県の方針をご説明いただいたわけですが、この件についていかがでございましょう。ご意見ございますか。

(「異議なし」の声)

<神野会長>

ではこの通り原則として公開ということを進めさせていただければと思っております。ただ場合によってはでございますが、私の経験では特にまとめの段階で非公開にした方がいいと判断できる場合には、先ほどの規定に従って私の責任において皆様方にお計らいした上で、そのような措置を取らせていただく場合もあるかもしれませんので、ご了解いただければと思います。

続いて会議事項の(2)から(4)まで、事務局から一括で説明いただこうと思っております。

(2) 新たな観光振興財源検討スケジュール(予定)について

<小林課長>

それでは資料(2)から一括して説明させていただきます。

資料(2)新たな観光振興財源検討スケジュールでございます。新たな観光振興財源の検討につきましては冒頭観光部長からもお話をさせていただきましたが、7月27日に知事から観光振興審議会に対して諮問が付託されたところでございます。

資料2の次のページに諮問書の写しを添付しておきますのでご覧いただきたいと思っております。コロナ禍を経て打撃を受けた観光産業の再生や社会、価値観の変化によって生まれた新たな課題への対応などにより、より一層進める必要があり、その持続的かつ安定的な観光振興財源の姿や仕組みを検討したいので、その基本的な考え方について意見を求めるとされておまして、その総合的な検討の場としまして本検討議会が設置されたところでございます。

スケジュールの方戻っていただきまして、記載のスケジュールの左側が本検討部会になります。本日お集りの有識者の皆様と左側のスケジュールで検討を進めてまいります。合わせて市町村との検討も並行して進めていきたいと考えております。

本日第1回検討部会から検討がスタートしまして、年内に検討部会を3回開催し12

月の第3回検討部会で検討結果報告書(案)を取りまとめ、年明けにパブリックコメントを実施した上で3月の第4回検討部会において報告書を決定し、年度末を目途に県観光振興審議会として知事に対して答申というスケジュールを想定しております。

併せて長野県内の市町村には県と同様独自の新たな観光振興財源の検討に着手されている自治体があることから、市町村との情報を共有しながら検討を進めていきたいと考えており、情報共有意見交換の場として県と市町村の観光担当課長で構成する検討ワーキンググループを設置したところであります。真ん中の列が市町村との検討となりますが、今週の3日に、市長会の役員市6市及び参加を希望する4町村の観光担当課長をメンバーとしまして第1回の会議を開催したところでございます。メンバーは6市4町村以外にも、希望する市町村にはオブザーバーとして参加いただくなど市町村と情報共有意見交換を緊密におこなっていききたいと考えております。この市町村と検討ワーキンググループは年内3回の開催としまして、取りまとめた検討結果は12月の第3回検討部会に報告し、市町村の意見を本検討部会の報告書に反映できるようにしていきたいと考えております。なお市町村との調整の場としましては12月の検討結果報告書を取りまとめる前に、県と市町村との協議の場等を活用しまして知事と市町村長が直接意見交換をおこなう場を設けていきたいと考えております。

スケジュール右側は各種調査の実施についてです。人流データ調査については、本県を訪れる観光客の属性、どこの市町村にどの程度の時間帯滞在し、どこに泊まり、どこからどこへ移動しているのか、また国内旅行なのかインバウンドなのか、こういったデータを市町村別に正確に把握するため携帯電話基地局の位置情報等による人流データを取得して分析しております。次回の検討部会には正当な基礎資料としてお示しいたしと考えております。

また、今日本県を訪れる観光客に対するアンケート調査も実施したいと考えております。

観光客に一定の負担を求める場合、適切な額や納得できる使途、負担税による旅行意欲の変化と意識調査を松本城や善光寺など県内の主要な観光地で実施する予定でございます。

(3) 長野県観光の現状・課題について

<小林課長>

続きまして(資料3)長野県観光の現状・課題でございます。

2ページをお願いいたします。長野県の延べ宿泊者数でございます。本県の延べ宿泊者数は東京、名古屋、大阪などの三大都市圏、インバウンドの観光地であります北海道、京都、沖縄等に続く全国のトップ10位前後に位置しております。

コロナ禍で減少した宿泊者数は2022年から回復基調にあり、2022年はコロナ前の2019年の約8割の水準になっております。なお直近の状況で申し上げますと本年7月の宿泊旅行統計調査の速報によるとコロナ前の94パーセントまで回復をしているところでございます。

3ページをお願いいたします。外国人延べ宿泊者数でございます。近年増加傾向にありました外国人の延べ宿泊者数ですがコロナ禍で大きく減少し2022年はコロナ前2019年のわずか1割の水準となりましたが、昨年10月の水際対策の緩和以降、回復局面にあり直近の状況を申し上げますと、本年1月から7月までの外国人延べ宿泊者数はコロナ前の約80パーセントまで回復をしてきたところでございます。2022年の外国人の延べ宿泊者数の全国上位は国際空港を有する大都市圏ですとか北海道、沖縄、京都等につぐトップ10位に位置しているところでございます。

4ページをお願いいたします。本県の観光消費額の推移でございます。インバウンド

の増加等によりまして 2019 年まで順調に推移して増加してきました観光消費金額はコロナ過で大幅に減少しました。2021 年に底を打ち回復局面にはあるものの、2022 年はピークであった 2019 年の約 7 割の水準となっております。本県の観光消費額の内訳として右の円グラフを見ますと、宿泊、日帰り別では宿泊が 6 割、日帰りが 4 割で県内、県外別では県外が 8 割、県内が 2 割また外国人の観光消費金額は全体の 1 割未満となっております。

5 ページをお願いいたします。観光客の属性です。本県への来訪者は年齢別にみると 50 歳以上が半数以上を占め全国と比較すると 18 歳から 34 歳の割合が少ないのが特徴です。また全国と比べ夫婦旅行が多い一方で一人旅は少ない傾向にあります。宿泊旅行者の居住地を見ますと隣接する関東からの来訪者が半数を占めております。

6 ページをお願いいたします。本県への来訪経験ですが、全国と比較してリピータの割合が高く、特に 10 回以上の来訪者が多いのが大きな特徴です。目的地までの利用交通機関は自家用車が 7 割近くと圧倒的に多く、次に多いのが新幹線と特急列車となっております。

7 ページをお願いいたします。本県への宿泊旅行の目的ですが、全国と比べて温泉や露天風呂、自然鑑賞、アウトドア、スキー等を目的とした宿泊旅行が多い一方で、地元の食べ物を目的とした旅行は少ない傾向にあります。

8 ページをお願いいたします。本県への学習旅行の状況です。コロナの影響により、令和 2 年度以降は学習旅行も大きく減少しております。コロナ前は高校が校数、生徒数共に最も多かった学習旅行でございますが、コロナ禍では中学校が最も多くなっている現状でございます。

9 ページをお願いいたします。長野県の観光資源の特徴です。本県は県土の約 8 割を森林が占め、県土の平均標高が全国で唯一 1,000 メートルを超える山岳県でございます。日本百名山として人気が高い山岳の約 3 割が本県に集中するほか、スキー場の数も北海道に次いで 2 位、日帰り温泉施設数も日本一となっております。また、清らかな水を生かし日本酒の酒蔵の数も全国 2 位。近年県として力を入れている、ワイン振興についても、ワイナリーの数も山梨県に次いで全国 2 位となっております。また自然資源以外についても長野県は日本列島のほぼ中央に位置し、東日本と西日本、太平洋と日本海の結節点にありまして、古くから中山道等始め主要な街道が通り、木曾の方では宿場町は伝統的建造物群として町並み保存されている他、博物館や美術館も全国一であるなど、歴史・文化資源にも恵まれているところでございます。

10 ページをお願いいたします。自然公園の状況です。長野県の場合、県土の約 2 割が自然公園に指定され、全国 3 番目の広さの一方、左側の山岳遭難の発生件数、総遭難件数の数は全国 1 位となっております。遭難者の 8 割は県外の登山者でございます。山岳遭難は、全国的に増加傾向にあります。本年も昨年を上回るペースで遭難が発生しています。特にインバウンドの回復によりバックカントリースキー等における外国人の遭難が増加。加えてコロナ禍における、アウトドアブームの高まりの中で、登山を新たに始めた方が多く、初心者の遭難も増加しております。北アルプス方面では自然公園が成立する前から、民間の山小屋や、登山道の維持補修を始めとする山岳環境の保全ですとか、遭難救助等の広域的な機能を担ってきましたが、コロナ禍を経てその広域的な機能の維持が困難になっているという状況がございます。

11 ページをお願いいたします。宿泊施設の稼働率です。長野県の宿泊施設数は旅館業法等の許認可ベースで 6,600 施設と全国最多でございます。そのうち、民宿・ペンション等の簡易宿舎は全国最多の 4,000 施設と全国と比べ、小規模な施設が多めなのが特徴です。なお、2022 年の宿泊稼働率は、一番右下にございますけれども、宿泊稼働率は 34.0%というのは全国最下位となっているところでございます。

12 ページをお願いいたします。宿泊施設に関する全国的なデータですが、宿泊施設におきましては、他産業と比べて、設備投資の金額が高額であることを課題として感じている事業者が多いというのが特徴となっております。

13 ページをお願いいたします。宿泊業における人手不足についてこれも全国のデータですが、全産業の中でも、特に飲食・宿泊業は人手不足が顕著になっているところでございます。

14 ページをお願いいたします。長野県の公共交通の利用者推移です。公共交通の利用者はコロナ前から減少傾向にありましたが、コロナ禍における移動の自粛等により利用者は大幅に減少し、回復傾向にはあるものの引き続き交通事業者には厳しい経営環境が続いているところでございます。

15 ページをお願いいたします。バス事業の営業収入・輸送人員推移です。乗合バス、貸し切りバス共にコロナ禍で大幅に減少し、こちらも回復傾向にあるもののコロナ前の水準にはまだ至っていないという状況でございます。

16 ページをお願いいたします。タクシー事業の現状です。今回タクシー事業の営業収入・輸送人員はコロナ前から減少しておりましたけれども、コロナ禍で大幅に減少しまして、またタクシーは最寄り駅から観光地への二次交通の手段として期待されているところでございますが、タクシー運転手も高齢化による離職等により減少しておりまして、こちらも人手不足が顕著になってきているところでございます。

17 ページをお願いいたします。県内スキー場の利用者数でございます。県内スキー場の利用者数は平成 4 年度をピークに減少が続いております。また、スキー場も平成 8 年度の 110 カ所をピークに徐々に減少をしているところでございます。

18 ページをお願いいたします。索道施設の状況です。索道施設ですが近年新設・更新がほとんど進まず全国的にも老朽化が進行しておりまして、長野県の索道につきましても、全体の 9 割以上が経過年数 20 年以上となっているところでございます。

(4) 長野県の観光施策の方向性について

<小林課長>

引き続きまして(資料4)長野県の観光振興施策の方向性についてご説明をいたします。

2 ページをご覧ください。これまでの観光振興の取り組みです。コロナ禍前の 2018 年に作成しました『長野県観光戦略 2018』と、その達成状況です。長野県観光戦略 2018 では施策展開の方向としまして、「第Ⅰ観光の担い手としての経営体づくり」「第Ⅱ観光地域としての基盤づくり」「第Ⅲ世界から観光客を呼び込むインバウンド戦略」を掲げ、主要指標として延べ宿泊者数以下記載の 7 つの指標について目標を設定していました。

3 ページをお願いいたします。主要指標の達成状況ですが、ご覧の通り、コロナ前 2019 年までは各指標とも右肩上がり順調に推移してまいりましたが、2020 年以降コロナ

の影響により観光需要は大きく落ち込み、主要指標も回復基調にあるものの、国内客の来訪者満足度を除き目標値を下回っております。

4 ページをお願いいたします。長野県の歳出決算額で、長野県の歳出決算額のうち、観光費の決算額と、その全国順位を示したものです。コロナ禍の令和2年、3年度、コロナ交付金等を活用しまして、県としては類似の補正予算編成により厳しい経営環境になります、観光財源を支えるため旅行代金の割引等の観光事業施策を始め、アフターコロナに向けた宿泊事業者の設備投資に対する支援など、さまざまな支援対策を講じており、特に令和2年、3年度観光部の決算額は100億円を超え全国5位の事業規模となっているところでございます。

5 ページをお願いいたします。直近3年間の取り組みと成果です。この3年間はまさにコロナ禍と重なったわけですが、一番上の観光地域づくりとしましては大町市、白馬村、小谷村の三市村で構成し10カ所のスキー場が集中するハクババレー地域を『一般社団法人 HAKUBAVALLEY TOURISM (ハクババレーツールズム)』を重点支援広域型DMO(観光地域づくり法人)に指定し通年型でのインバウンドの受け入れ環境整備に向けまして、無電柱化による景観形成などハード・ソフト両面から全庁的に支援して参りました。また長野県の自然豊かな山岳観光地を年齢や障がいの有無に関らず、誰もが安心して楽しめるようユニバーサルツーリズムの推進にも取り組んで参りました。この他、コロナ対策の国の交付金等を活用しまして、観光需要喚起策として、スキーリフト券等のアクティビティや、旅行代金の割引等を実施すると共に昨年度はアフターコロナに向けて「信州観光復興元年プロモーション」と銘打ち四季ごとに異なるテーマを設定し、四季折々の信州の多様な魅力を発信して参りました。

6 ページをお願いいたします。続いて今後の観光振興の方向性についてご説明をします。この『しあわせ信州創造プラン3.0』は本年3月に策定しました、今後の県政運営の基本となる総合計画でありまして計画期間は本年度を初年度として2027年度までの5年間となります。観光振興関係は五つの政策の柱の三つ目「快適でゆとりのある社会生活を創造する」の中に位置付けられております。長野県観光の目指す姿は世界水準の山岳観光地づくりでございまして。達成目標として観光消費額を設定しまして2027年の観光消費額の目標をコロナ前の最大であった2019年の8,769億円を上回る9,000億円と設定しているところでございます。主な施策については7ページの方で説明をいたします。

7 ページをお願いいたします。令和5年度長野県観光振興アクションプランですが、総合計画であります『しあわせ信州創造プラン3.0』を具現化し、アフターコロナにおける長野県観光の再生を着実に進めるため、本年度県全体で全県的に全庁的に取り組む施策を取りまとめたものでございます。3つの戦略、1つ目が「受け入れ環境整備を含めた環境地域づくり推進戦略」。2つ目が「長野県観光のプロモーション戦略」。3つ目が「インバウンド推進戦略」です。この3つの柱に沿って進めて参ります。

8 ページをお願い致します。それぞれの柱について説明致します。方針①「受け入れ環境整備を含めた観光地域づくり戦略」でございまして。長野県の特長、コロナによる旅行者ニーズの変化等を踏まえ、本県の強みでありますアウトドア、温泉、サイクルをメインコンテンツとして推進し、サステナブル及び、年齢国籍身体能力の細部に関わらず、

誰でも観光を楽しめるユニバーサルな観光地域づくりを展開して参ります。この中で特にサイクルツーリズムにつきましては、全県で 800 キロメートルに及ぶルートが確定した Japan Alps Cycling Road（ジャパンアルプスサイクリングロード）のナショナルサークルルート指定を目指しまして、サイクルステーションの整備などサイクリストの受け入れ環境の整備を、支援を必要となつて参ります。

9 ページをお願いします。方針②「長野県観光のプロモーション戦略」でございます。信州ならではの多彩なアウトドアカルチャーをメインテーマとして発信するとともに、デジタルを活用して各地域の魅力を見える化していきます。現在「Go Nature（ゴーネイチャー）」「Go NAGANO」のキャッチフレーズにプロモーションを展開しているところです。ターゲットとしては従来のメイン客層である高齢層を維持しつつ、現地での消費が期待できる若年層 Z 世代を意識し、新たな喧伝作りの支援やプロモーションを実施しております。

10 ページをお願い致します。方針③「インバウンド推進戦略」です。量、旅行者数から質、消費額への転換、また観光拡大意識への展開としまして、欧米豪等の高付加価値旅行市場開拓を通じて量から質への転換を図って参ります。

11 ページをお願い致します。長野県観光振興アクションプランの 3 つの戦略に基づき構築した令和 5 年度の主な取り組みについてご説明を致します。最初に観光地域づくりです。①の「サステナブルなインバウンド観光地域づくり事業」ですが、こちらは、自然資源や文化資源の保全等に配慮したサステナブルな観光地づくり、現在長野県ではまだ事例がない持続可能な観光地の国際認証取得「GSTC」の認証取得を目指す意欲ある地域を支援して参ります。こちらの支援モデル地域を募集したところ、県内の 7 地域から応募があったところでありまして、それぞれ各地域の特性を活かした持続可能な観光地域づくりに向けまして、体制作り・事業構築を県観光機構と連携し支援して参ります。②の「観光地域づくりにおける研究機能強化事業」です。県内には 15 の DMO、観光地域づくり法人がありますけれども、それぞれからお話をお聞きすると、専門人材や実財源の不足等が課題となっております。県と県的 DMO であります観光機構が広域的な視点から本県の強みに対する各観光地のポジショニング等を分析、把握分析をしまして、各観光地の差別化、競争力の強化を図るなり、県内各地 DMO のネットワーク構築等も含めまして各地域における観光地域づくりを支援して参ります。

12 ページをお願い致します。「観光地域パッケージ型インターンシップ促進事業」です。喫緊の課題でもあります観光関連事業者の人材確保に向けて、観光業に関心のある学生等を観光地に受け入れ、地域内の宿泊業、DMO 等、様々な業種を体験するパッケージ型インターンシップの支援を本年度からスタートしたところでございます。次の「ユニバーサル推進事業」では長野県の自然豊かな山岳高原観光地を年齢や障害の有無に関わらず誰もが安心して楽しめるよう受け入れ環境を整備して参ります。具体的には、専門機器であるアウトドア用の車いす等の導入支援や、地元信州大学との連携によって専門機材の運用技術を身に付けた実務人材の育成を進めて参ります。

13 ページをお願い致します。長野県観光のプロモーション、「観光情報の戦略的発信・活用推進事業」です。今年度のプロモーションは従来の観光キャンペーンに加えまして、県公式観光サイト『Go NAGANO』の機能効果により、サイト訪問者の嗜好等のデータを

把握することで、ターゲットごとに最適化された情報発信を行うなど、多様化する現在の観光需要に対しましてデジタルマーケティングによりデータに残す戦略的なプロモーションの展開になります。

さらに 14 ページをお願い致します。インバウンドの推進についてです。急激なインバウンド需要を取りこぼすことがないように、従来の中国、台湾や東南アジア向けの取り組みに加えまして、旅行消費単価が高い欧米豪の国家市場の開拓に向け、海外現地コーディネーター、レップの設置の始め、中山道など本県の地方文化探検コンテンツを活用したアドベンチャーツーリズムの推進等によりまして、外国人観光客の誘致を推進して参ります。

(5) 観光振興財源確保の必要性について

<小林課長>

(資料 5) 観光振興財源確保の必要性でございます。

2 ページをお願い致します。長野県観光の現状から、今までご説明申し上げましたまとめになります。観光消費額はインバウンドの増加を背景に近年増加傾向にあり、2019 年には最高金額となり、コロナ禍で目減りした分をインバウンドの復活等を追い風に今現在回復基調にあるようです。

3 ページです。一方、観光関連事業者におきましては、施設設備を利用者減による経営状況の悪化、高額な設備投資も困難といった課題に直面しており、公共交通の利用者減や、バスタクシー運転手の高齢化人材不足等、コロナ前からの構造的な課題がコロナにより顕在化、加速化している状況にあります。

4 ページをお願い致します。コロナ禍を経てサステナブルな旅行への需要というものが、世界的に潮流高まるなど価値観の変化により新たな観光需要も生まれてきている一方で、こうした新たな需要を最大限に生かし、支えられるだけの人材確保が特に宿泊業等におきまして困難になっているのが実態でございます。

5 ページをお願いいたします。こうした状況の中で長野県観光の目指す姿として考えておりますのは「住む人も訪れる人も幸せな世界水準の山岳高原観光地」これが長野県観光の目指すものとして掲げているものでございます。具体的な目標としましては、今後観光サービスの高付加価値化等による消費単価の引き上げということを視野に、コロナ前を超える観光消費額 9000 億円を目標に設定しておりまして、受け入れ環境整備も含めた観光地域づくりの推進、長野県観光のプロモーションの展開、インバウンドの推進、それらに向けまして、長野県観光の持続的な課題と位置付けて取り組むみを加速していきたいと考えております。

6 ページ、説明最後になります。新たな観光振興財源確保の必要性です。これまでご説明申し上げました長野県観光の現状と課題を踏まえまして長野県観光の目指す姿を着実に具現化していくためには、新たな観光振興財源の検討が必要だと考えているところです。この新たな観光財源確保の検討につきましては、ちょうど 1 年前に、インバウンドの水際対策が大幅に緩和されて、観光にも少しずつ明るい兆しが見え始めた昨年 10 月から一応の再検討を始めまして、この間多くの市町村事業者の皆さんと意見交換を行ってまいりました。その中で共有したことは、人口減少下におきまして、地域の維持発

展のため交流人口・関係人口や他産業への波及が見込まれる観光は、地域活性化の切り札である一方、本県の目指す世界水準の山岳高原観光地づくりに向け、インバウンドの増加やオーバーツーリズムの財務的受け入れ環境整備等、直面する課題への対応が急務だという事でした。先ほどのお話で申し上げましたが、スキー人口の減少ですとか、公共交通の利用者数の減少ですとか、人口減少に伴い進んできた構造的な問題がコロナ禍を経て今、顕在化が加速化しつつありまして、従来地域の観光事業者の皆様が主導で開発再興投資行われてきた長野県の観光でございますけれども、そちらのほうも、なかなか困難な状況にございました。その中でコロナ禍につきましては、最も打撃を受けたのが観光や交通事業であります。県ではコロナ禍の危機的な状況のこの3年間、国の交付金等を活用して山小屋を含む宿泊事業者、または索道事業者、その事業者の皆さんに対しまして、自由化企画をはじめましてアフターコロナに向けた利益増の設備投資に対する支援を行ってきたところでございます。こうしたその県の観光施策の財源でありました、大部分を占めておりました国の交付金等も現在縮小しつつあるところでございます。これはインバウンドが急速に回復し、国内外との観光地との競争がますます激しくなることが想定される中で、長野県の将来によって世界中の観光客の皆様を選ばれ、安全安心快適に過ごし満足して帰っていただける目的地であり続けるため、サステナブルやユニバーサル視点から一層の受け入れ環境整備等が必要でありまして、住民の皆様方の税負担に頼るといふ事だけではなく、観光産業或いは観光ツーリズムの受益者となる観光客の皆様からの一定のご負担をいただくなど、従来の税財源や一過性の交付金に頼らない長期的、安定的な財源確保を検討していく必要があるというのが庁内で検討してきましたプロジェクト振興策の内容です。

7ページ。本日有識者の皆様に審議をお願いする事項が二つございます。

一つ目は長野県観光の現状課題や観光振興政策の方向性を踏まえまして、長野県の強みや課題、今後取り組むべき施策を引き出してご発言をいただきたいと思っております。また、それらの課題、長野県の今後の取り組みを踏まえまして、新たな観光振興財源の確保の必要性につきましても、皆様のご助言をお伺いしたいと思っております。

それからもう一つ、(参考資料4)として長野県観光の現状から資料編というものがございます。こちらの長野県観光の様々なデータを今回、これを機会に非常に取りまとめたものです。いままで長野県のどこの市町村に宿泊利用者が行っているのか、どこの宿泊地に海外の外国人が行っているか、そういったものが出ていますので、また後ほどご量が多いのでご覧頂ければと思います。事務局から説明は以上です。よろしく願いいたします。

<神野会長>

どうもありがとうございました。

ただいま、事務局の方から、長野県の観光の現状や課題、それから長野県の観光振興施策の方向性、更には観光振興財源確保の必要性等々について説明をいただきました。

この部会には3つの段階があり、1つは私達が共同で解決して取り組まなければならない課題、そういったものを認識する段階です。私達の取り組まなければならないといけない状況を認識し、課題を共有する。これはそれぞれ皆さんご意見が違うでしょ

うから、違いを違いとして認識するということを含めて、出発点としてすること、私たちの課題、私達の使命を共有することが、一つ目の段階の重要な役割ではないかと思えます。

2つめの段階ではでは本格的にそれぞれ論点についてご意見を頂戴して、その頂戴したご意見を最後にはまとめの作業に入りますから、まとめていくということが3つ目の段階となろうと思えます。

ただいまの事務局からご説明をいただきました現状や、それから今回のこの委員会のミッション等々について、皆さん方から個々に、ご質問やご意見を頂戴しながら、今日は少なくとも私達の使命を共有しておきたい。こういう課題で取り組まなくちゃいけないということをお共有しておきたいと思っておりますので、今、ご説明いただきましたことを念頭に置きながら、少し自由にご発言を頂戴できればというふうに思っております。

それで、本来は自発的にご発言を頂戴した方がいいのですが、大変申し訳ありませんいつもいつも名簿順で申し訳ありません。金澤委員の方からまずご発言を頂戴できればと思えます。

<金澤委員>

長野県の観光について、まとまりのある発言ができればいいのですが、神野部会長がおっしゃった「認識の共有」というところ触れさせていただきます。

長野県の観光について、言葉が共通化していない方が多く、「認識の共有」をしっかりした上で議論をしていかないといけないかなと思えます。

例えば「マーケティング」。マーケティングのことをプロモーションと捉えている人もいたり、リサーチのことを考えている人もいたり、そういう人同士がマーケティングについて議論をしても何が大事なのかというのははっきりしません。

長野県はとても縦に長く、以前30年ぐらい前、栄村の方から「白馬は雪降らないじゃないか」と言われたことがあります。白馬には立派なスキー場があって、雪が沢山降りますが、栄村や野沢温泉村から見たら、飯山以北ほどは雪が降らないという認識です。更に南の方に行って飯田の方に行くと、雪は全然降らないという認識で、除雪一つ考えても行政の在り方が異なり、意見が統一できないだろうと思えます。

観光も一緒に、軽井沢がある東信、雪が降る北信、そのほか南信、中信、色々あるわけで十把一絡げに話をすること自体に問題があり、細かなところの認識として、その話は北ではいいけれど南はどうするという認識を揃えていかなければならず、この時間では少ないかという気がしています。

それからこれは国の行政の問題で長野県がどうのこうのという話ではありませんが、例えば保安林、木を切つてはいけない場所があります。生物の多様性とか重要で、豊かな自然を育むということが普通で、間伐できないと暗い森になって生えてくる草花、木も多様化しない。昆虫が寄らない、昆虫が寄らないから鳥も来ない、捕食者も集まらない。長野県の自然は日本でも有数の豊かさだと思えますが、こういったものに対して、肝心の意識統一もできていない。例えば、木を植えればそれでいいだろうという自然保護の考え方をされる人方もいるし、多様性についてDNAまで掘り下げて語る方もいらっしゃいますが、結局、観光というその場のプロモーションに走って、本当のレベルで長

野県の自然を考えていないのではないかとというのが常々疑問です。結局本質をおろそかにして一年一年のプロモーションにすぎているからブランド力が高まってこないのではないかと思います。

長野県が掲げる国際的な山岳リゾートというところに向かうには、この姿勢を見直してほしいです。本質を捉えることが薄いような気がするの、要は課題だと思います。

強みに関しては、自然環境、特に先ほど課長がおっしゃられた平均標高が1,000メートルというのは、本当にいい場所だと思いますし、東京から近い、羽田空港から近いロケーションもそういった強みを支えています。こういった強みを生かして、深い意味での高付加価値を与えてほしいと思います。

<神野会長>

はい、ありがとうございます。

それでは、小林委員よろしく申し上げます。

<小林委員>

課題について、宿泊事業者、公共交通の側から見させていただき、本県は南北に非常に長く、東から北に向けては新幹線があり、南はリニアが通る、そして県の中心にはひよっとするとハブ化する空港があるというところですが、来ていただいたお客様に非常に交通様式は豊富ではありますが、僕らも責任を感じるにはありますが、2次元というか点でしか捉えられておらず、来た人を線で繋げていくことができていません。先ほど宿泊施設の稼働率が低いという話もありましたが、これからは滞在型で、白馬がいい例になるかもしれませんが、日本人もインバウンドも滞在型の旅行者を受け入れる工夫が必要で、そこに対してお金を落としていただく工夫が必要だと常日頃感じています。

例えばインバウンドにしても、中継点として来ました、中継点として泊まります、なぜかと言うと、そこに魅力があるわけではなく、旅程上の都合で泊まられている方が、稼働率では分からない部分ですが、どれだけいらっしゃるのかということが、松本市などは同じような課題を感じております。西の方には高山があり、その先には白川郷や金沢がありますが、松本だけでなく、県内全域、東信、南信としっかりつなぐ施策が必要かと思っています。

それからもう一つは冒頭にもありましたが、これから間違いなく国内の人口は急激に減少していきます。そこに対する観光消費額について、全体的な国内旅行者分は減りますので、そこに対してインバウンドでどれだけ上積みできるかです。高付加価値旅行者として単価を上げて、先ほど言った国内の消費額は9：インバウンドは1とありましたが、例えばそこを7:3にしていくとか、人口減少の行く先を見据えた指数としてどうしていくかということが一つあります。

さらにもう一つは、観光に従事する我々交通事業者もそうですし、宿泊事業者もそうですが、労働人口減少による人手不足の問題がこの産業では大きな課題かと思っています。賃金ベースで見ても、全産業の中でどちらかと言うと低い方の部類でありますので、観光産業で働くことの魅力をと価値を上げていかないと、仮に労働力を外から持ってく

るにしても、観光地の魅力は良くても働くことに対する魅力が少し前面に出てきて、両輪で回していかないといけない課題かと思っています。

あと、財源の話はまた次回になりますが、これだけ資源があると、県外資本、海外資本も入って来やすくなっています。その辺がウェルカムなのか、ある程度のところで規制の線を引くのか、みんないい所だけ取られて税収は全部外に出ていったとはなると本末転倒になりますので、その辺の開発も含めて、どうあるべきかについて検討していくべきかと思っています。

<神野部会長>

はい、ありがとうございます。貴重なご意見、納得いたしました。引き続き峯村委員お願いできますか。

<峯村委員>

いわゆる長野県の観光の共通した課題をみんなで認識しようという議題ですので、スキー場について申し上げなければならないという認識です。

私どもは飯綱リゾートというスキー場運営会社を特別清算してきた側でございますが、長野県の魅力としてスキー場がたくさんあることは間違いございません。しかし不安なく経営しているところは数か所のスキー場で、残りのスキー場はどうやって整理をしようか、どうやって維持をしていこうかということに四苦八苦しているということを共通の認識として持っていただきたいです。スキー場に対して、何をしなきゃならないのかということについて、今後また皆さんのご意見を頂戴したいと思います。

もう一つ、長野県の素晴らしい魅力として温泉があります。私の住んでいる周りの温泉地、また長野県内の温泉地、少し足を延ばした富山、石川の温泉地へ行っても、昔栄えた旅館が大資本に買収されて一泊 7000 円とか 8000 円の旅館になっています。しかもそれでも上手くいかないというところが多いようです。

長野県には魅力ある温泉が多くありますが、お客様がどんどん増えて左団扇というよう温泉地はほとんどないというのを共通の認識として持っていただきたいと考えています。

東京から新幹線で一時間半で長野駅まで来られる距離にあって、これだけ観光資源と呼べるものがあって、このような現状となっていることは、どこか他の地域、外国でもよいので、そういう地域の立ち直った歴史に学ぶような事例はないかと思っています。今のように新しい魅力にばかり取り掛かるのではなく、それを元に戻した、人間を呼び戻すような、神野部会長が書籍の中で、失ってきた人間の絆を取り戻せるような新しい観光産業の目標を見つけていかなければ、長野県の観光産業にお客さんが増えていかないのではないかなということも認識していただきたらと思っています。

<神野会長>

はい、ありがとうございます。それでは森委員お願いできますかね。

<森委員>

ありがとうございます。

いろいろ出て参りましたが、我々旅館ホテル宿泊業界としましては人手不足が非常に顕著な問題であります。

観光業界は、特に宿泊業界ですが生産性の低さ、それから賃金水準の低さというのが、非常に問題になっております。さきほど働くことへの魅力作りという話がありましたが、本当にそういったことをやっていかないと。それは働き甲斐ということだけでなく、やはり給料の面でもしっかりしたものを出していかないと、この先さらに人材不足に陥ると思っています。

この問題は、観光地の問題ですと宿泊事業者ですとか観光業者だけではなく、観光を支える人材の不足というものがあります。それは例えば観光協会のようなところだと、ガイドやボランティア、イベントを支えるスタッフ、そういった人たちが本当に足りていないというのが現状です。

様々なイベントを行うにはボランティアですとかいろいろな方の力が必要ですが、地方に行けば行くほど人口減少が進んでいますので、どうやって確保していくかというところに、必要なものをしっかりお給料として払っていくものでないとなかなか難しいというのが現状です。

世界水準の観光地づくりというお話を伺って、今日も何回かキーワードが出てきますけれども、我々のライバルは世界中のリゾートです。世界にある素晴らしいリゾートからお客様をこっちに引っ張ってこなきゃいけません。我々が競おうとしたら、索道設備の老朽化の問題が出てきましたが、物は古いし人はいないしでは世界中のリゾートに勝つことはできません。世界水準の観光地づくりというところでは、我々は世界水準の観光人材づくりというのも必ず入れていかなければいけないかと思っております。

持続可能な観光という話がありました。持続可能っていうのは、環境だけでの問題ではなくて先ほどの説明の中でも出てきましたけれども、持続的それから安定的な財源の確保っていうのは、地方に行けば行くほど必要かと思っています。

最初の質問に対して、今の課題、今後、それから取り次ぐべきものとしてご意見申し上げます。以上です。

<神野会長>

はい、ありがとうございます。それではオンラインで出席いただいています矢ヶ崎委員をお願いします。

<矢ヶ崎委員>

はい、ありがとうございます。はじめに、県からお示された資料が、よく分析をされていると思って拝聴しておりました。

観光は何のためにやるかということについて、長野県にとって重要な産業として地域経済の足腰を強くするためということがもっとも大事なことなではないかと思えます。そういう観点から、需要の平準化であるとか、旅行消費額単価の向上であるとか、利益率の向上であるとか、それらの点に力を入れて進んでいかなければならないであろうと考えながら聞いておりました。

平準化ということに関しては、スノーシーズンなり、グリーンシーズンなり、長野県が持っている雪という資源をエッジの効いた姿で世界に魅力発信していくことが核となることだと思います。私も冬になると長野県内のスキー場へ伺います。世界水準スノーリゾートとしての観点からすると、もっとテコ入れが必要なのではないかと考えております。

また、スノーシーズン以外の様々な魅力も組み合わせる形で、需要の平準化を目指していかなければならないと思うのですが、口幅ったいのですが、長野県としてのマーケティング力を強化していくことをされたいと思っています。

マーケティングは県だけではできませんので、DMOなどがどのような役割を果たしているのか、はっきりと見えていないところもありますし、長野県のように観光資源が豊富なところの場合には、特定の観光資源しかないところはマーケティング視点が明確なものとは異なり、総合的なマーケティング力が必要になってきます。

今後戦略性のあるものを作っていかなければいけないということだと思いますので、マーケティング力を強化した上で、どのように需要の平準化を図っていくのかという方向性を示すことが一つ重要な視点としてあるのだと思います。

また、消費単価を上げて利益を向上させていくことに関しては、現在、アドベンチャーツーリズムのようなコンテンツを狙っていく追い風が吹いておりますので、このチャンス逃してはいけません。人手不足の局面からみても、アドベンチャーツーリズムできちんとお金をいただいて利益をいただくようにシフトしていくということが大事だと思っています。

こういったことを支える土台として、観光産業においてもっとも地域にお金を回す力が強いのは宿泊産業です。観光産業の中で宿泊産業がしっかりしていないといけないことは、皆様方ご承知のことだと思いますが、先ほどご説明にもありましたように長野県場合は小規模の宿泊事業者が多いのが特徴です。

宿泊業界の中にも、生産性向上のためにDX化にしっかり取り組んでいこうという動きもありますが、小規模のところだと難しいところもあるのではないかなと思います。こういった課題に対して、しっかり取り組んでいくことが非常に重要です。

先ほどデータのなかで日帰り客が多いというのは驚いたのですが、ご指摘のありました通り、滞在型にシフトしていくために現場はどのようにならなければいけないのかということも大事かと思った次第です。

感想めいたことになってしまいましたが以上です。

<神野部会長>

どうもありがとうございました。委員の皆様方からご意見頂戴いたしましたので、私たちがここで与えられているミッションを共有しながら、これから相互に意見を交換し、それぞれの論理を純化させていく形で、認識していくことが重要ではないかと思っています。

私の方からも。私はミクロとしての各事業の活動の専門家ではなく、マクロ全体の見通しをやる財政学をやっておりますので、この立場から考えると、まずマクロの方でやらなくてはいけないことは、観光を担う企業が活動していくうえでの条件整備です。ど

ういう観光政策をするのかということを含めて、観光産業を舞台に活動されている企業に、どのような条件を整備したらいいのかということが、それぞれの地域で観光政策をすすめていく上で重要かと思います。

それぞれの地域で重要なことは、良いところを見つけることです。ここでも長野県のご説明いただきましたが、教育でも何でも同じことですが、良いところを伸ばしていくということが重要で、極端に言うと欠点は直す必要はないのではないかと思います。欠点を直しても人並みです。魅力をどのように伸ばしていくのかということだろうと思いますので、伸ばしていくときにどういう条件を、財政学の言葉では「社会的インフラストラクチャー」といっているような条件を整備していくことでどういう発展が可能になるのか。

発展するという英語 develop(ディベロップ)は、封をするという英語 envelop(エンベロップ)の反対語です。封を開いていくことがなぜ発展なのかっていうと、発展というのは内在しているもの、これをどんどん伸ばしていくことが発展であり、例えば卵が幼虫に、幼虫がさなぎに、さなぎが成虫にというように、発展し、成長していくということです。植物で言えば、種が芽を出して葉になるのと同じ、花を咲かしていく、こういうふうには内在してものから発展する。

内在していくものを発展させていくためにどのような条件整備が必要か。肥料が必要かとか、そういうことを成分と言いましょか、公共の事業として必要なのではないかと思います。

無いものを外から力で変形させても魅力にはならないのです。

例えばこの(木の)机。私たちが外からの力で机に変形させたものであっても、木が机に発展したとは言いません。木は机に成長したとは言わないので、内在しているものを見出して、いいところをどうやって伸ばしていくか、伸ばしていくときに、どういうサポート、共同事業が必要かということを考えていくことかと思っています。

皆さんのご意見にもあるように、長野には様々な特色があり、自然には地域ごとの顔がありますので、自然景観と我々が呼んでいる顔には、それぞれの顔があります。それぞれの顔の良さを、自然景観の良さを生かしていく、そういった違う自然の中で人間の生活の営みは育まれていますので、そういったそれぞれの営みを発展させながら、多くの人々から訪れてみたいと思っただけのようなところを作っていくことかと思っております。

具体的な議論に挙げていただいて、どういうサポートをしようか、どういう共同事業で観光強化が図れるのか、踊っていくという表現は変ですが、発展していくことができるかというに念頭を置きながら、ご発言いただければと思います。

<金澤委員>

私はスキー場の話をしなきゃいけない立場ですが、他の委員の方からから言っただき、エッジを効かすっていうお話もありましたし、神野部会長の話として内在する魅力を見ていくという点でも、やはりスキーであり雪でしょうか。

その場合、南信の方をどうするかということ。南信は南信で、雪以外にエッジを効かせられる魅力があるのかもしれませんが、私は、長野県の雪は本当にすごいなあと思

ます。平均標高 1,000 メートル以上の地域は他になく、春夏秋冬使っていくことが一番いいです。

あとはどういったアプローチを、インセンティブを付けるか。宿泊は目的があるわけですから、観光目的として雪をテーマにしていくのが神野部会長のお言葉から連想するにいいと思います。

<神野会長>

そうですね。例えば中国だと雪はほとんど見られないです。雪が舞う程度のところは、世界にたくさんありますが、長野県と条件に近いスイスのような高度の高いところぐらいでしょうか、雪を降る、雪が積もることは魅力の一つになっています。

<金澤委員>

無料のアドベンチャーリズムや、需要の平準化という点から、山岳リゾートが命題になってきます。山については本格的なトレッキングをする方もいれば、軽いハイキングという方もおり、コロナで一過性の面もあったかもしれませんが、健康面からいい空気を吸って健康になるというそういったものを推していければというふうに思います。自然環境という大きな括りになりますが、魅力かと思います。

<神野会長>

自然を楽しむ登山というのも海外にありそうでなかなかないです。例えば中国の高い山は、緑があまりなく、水墨画に出てくるような岩だらけで、ところどころ松が生えているような山が多かったりします。温帯性雨林というのでしょうか、緑に包まれている山というのは、あまり無いというのは事実です、山の緑と雪、いずれも水と気候に関わる長野県の魅力です。ありがとうございます。

<峯村委員>

神野部会長が質問されたことに答えているかどうかわかりませんが、私もスキーが大好きで、多いシーズンは年間 40 日ぐらい滑ります。白馬でスキーを背負って八方池の辺まで行ってそこから滑り降りてくるとか、あのあたりの高い山々を見ながら滑る非日常的な瞬間に魅力を感じています。ただ、そういう場所はそういう場所でもいいのですが、内在している魅力という点からいえば、水の無いような地域にも色々なため池があります。

ため池には「入っちゃいけないよ、危ないから」という看板がありますが、今年のようにものすごく暑いときは、魚釣りもできたり、水質が良かったため池はスイミングだって OK だったり、湖畔に泊まることできたり、そのようにそれぞれの市町村が魅力として取り出して、それをいかに華麗な垢ぬけた魅力に育てて行けばいいのではないかということをおもいました。

<神野部会長>

はい、峯村委員ありがとうございます。例えばスイスなんかとちょっと違う魅力、例

えば、棚田ですよ。長野にもたくさん美しい棚田があります。田んぼというのは絶対に自然破壊がないのです。畑は連作したら自然破壊になってしまいますが、世界で一番古い水田を持っているのがインドで、8000年保たれています。なぜかという水回すから保たれるわけです。保たせるために水を回す、回すから緑、緑が棚田という景色を作っています。

緑と水という視点は、雪にもつながるものがあると思います。

<森委員>

はい。新たな観光振興財源の確保の方で発言させていただきます。

この「しあわせ信州創造プラン3.0」というところで、暮らす人も訪れる人も長野県を楽しんでいるという部分、大事なことだなと思っています。

観光地で働く人、また住む人が幸せな暮らしをしているところに、訪れる人達が憧れを持っていただくような形にしていかなければいけないと思っています。

そのために何が必要かと、先ほども申し上げましたが、観光の人材の確保、観光地域のお金が本当に足りていないことを日々痛感しております。

世界水準の観光地づくりにおいて10月31日にスノーリゾート信州の会議が行われますが、白馬村の姉妹村のレツヒの観光局長がみえられるということで、県関係の人が私と話をするといつも同じ話かと言われるかもしれませんが、やはりヨーロッパの観光地は観光税、宿泊税の在り方というものが飛び抜けて素晴らしいです。

日本の観光地と比べてあまりにも違いすぎるというのが問題だと思っており、今回の観光財源の話では、世界水準の宿泊税・観光税を長野県で検討する話になっていただきたいと思っています。

全国の旅館・ホテルの経営者の皆さんとこういった話をする機会がありますが、現状行われている宿泊税に満足している経営者は一人もいません。すごく不満を持っています。とても気を付けなければいけないことが、2000年に廃止された特別地方消費税と同じようになってはいけないということです。観光税、宿泊税という議論と、特別地方消費税の復活とは違うものであることを明確に打ち出さないとはいけません。全国の宿泊施設経営者の方々は2000年に自分たちが特別地方消費税を潰したという自負がり、舞い戻ってまた何かやろうという形になります。特別地方消費税とは違うことを大きく打ち出してってもらいたいと思っています。

一つ事例として我々野沢温泉村の姉妹村にオーストリア・チロル州のサンアント村があります。そちらの事例を紹介します。サンアント村は2,600人しか住んでいない村で、野沢温泉村が3,300~400人くらいですので、さらに小さい村ですが、村が取っている宿泊税が3ユーロ、15歳以上から3ユーロ取って100%村の観光局で使います。その金額が今日のレートで6億5,800万円。6億5,800万円が宿泊税として2,600人の村に入っています。

さらにそれに加えて観光税。観光税はチロル州がとります。観光事業者は100%観光需要依存というところで収益の1.62%。例えばガソリンスタンドは地元の人でも使うので、収益の半分に1.62%を掛けたりします。観光税のだいたい7.4%をチロル州がとって後の92%を村に下ろします。その村の収入が約7億になります。2つ合わせて13億

5,000万円ほどが2,600人ほどの村で観光の財源として使われています。

我々野沢温泉村は観光協会が使っているお金が2500万円。これでどうやって競争しろということ。明らかに競争条件が違うことをしっかり認識した上で色々な議論に臨まなければいけないなと思っています。

観光事業者に関しては、お客様から頂くまた事業費1.62%もお客様にマークアップしてお客様から頂き、しっかりお客様に返す意識です。お客様が受益者である意識をもってやっているということは素晴らしいことだと思っています。我々もこのように世界水準の観光地づくりには世界水準の財源が必要であるという認識を持って臨みたいと希望しております。

<神野部会長>

はい、ありがとうございます。矢ヶ崎委員お願いできますか。

<矢ヶ崎委員>

今、宿泊事業をされている方から世界水準の財源というお話があり、心強く拝聴しておりました。

全面的に賛成をさせていただきたいと思います。素晴らしいことだと思います。宿泊税が最初入った東京都があのような感じですので、東京都ですら10数億単位という財源をどうしようというところから始まっておりましたが、将来の長野県を担うための財源の一つとして、しっかりとしたものにしていくべきかと思っています。

神野部会長が仰って下さった予算の部分に話を戻させていただきますと、私も雪であるとか山ということだと思っています。特にアジアの方々は、私の郷里の北海道のことを、上質な雪が降るということでアジアの宝物だと表現して下さることがありますが、長野県もしっかり雪が降りますし、いい山があります。

それもただ単に山があることだけではありません。人が住んでいる所の近くに素晴らしい山があるということは、世界と違う競争力を持っているということです。スイスやアメリカ等にもいい山はありますが、人々が住んでいる所からとても遠いです。長野県には日常生活の中に素晴らしい山があり、山と暮らしてきた文化があり、海外から来た人、国内から来た人は利便性よく素敵な山を四季それぞれに楽しむことができる。これは北海道にも無い魅力で、長野県の強みとしては誇るべきことだと思います。

一方雪や山には魅力がありますが、先ほどの資料にもありました通り、遭難者や雪崩というリスクもあります。雪や山の特性等はよく理解されていない方にとっては、さらにリスクが増大するということになります。リスクを減らしていく、リスクがクライシスになったとき、実際に遭難者が発生したとき、どういう対応をとっていくのか、先ほど部会長のお言葉をお借りするとサポートする、リスクや実際のクライシス等どのような対応をとるのか、どのように安全を守るのかというところにも財源が使われていくべきなのではないかと思っています。

話は変わりますが、長野県の魅力たくさんあると思います。南から北から東から西から、旅行者にとっては大変楽しいのですが、それぞれの多様な魅力を横櫛でまとめていけるようなツアー、アクティビティというものが具体的にでてくるといいなとも思っ

ています。例えば、日本の観光行動は物見遊山というか、見に行くだけということが多くあったのですが、欧米豪を中心として人は歩くことが観光の中でも大きな柱となっています。ルーツを辿る旅や巡礼がそういうものの例にはなりますが、長野県でも多様な魅力を歩いて回る、例えば十日間の旅も非常人気が出ているものがあります。多様な資源に横櫓を刺すために歩いて回る、そのために荷物を先に送ってあげることや、ガイドさんが必要になることなど、新しいサポートサービス、サポートビジネスによって地域が面白いことになります。長野的な新しいツーリズムを生み出すような、そういうチャレンジにも、新たな財源からお金が回り、元気にヤンチャにチャレンジできるということもあればいいと思いました。以上です。

<神野部会長>

はい、ありがとうございます。それぞれの委員の方々から自由にご意見・ご質問それと講義をしていただければありがたいです。

<金澤委員>

部会長が悪い所は気にする必要はないとおっしゃられ、森委員のご意見にもありましたが、働く人がそのモチベーションという話あります。外から来た人間からすると長野県の人とても勤勉で真面目で、余暇を楽しんだり、消費をしたりしない。

野沢温泉村や白馬の人達のターゲットは海外に向いていて、海外の遊び慣れた人たちが何泊か滞在することを想定して、そういう旅行者は自分たちで楽しいことを見つけ、その様子を従業員が面白がってサポートする風潮がありますが、長野県の他の地域にはそれがない。それで日本全体物見遊山という所に終始している。

マイナス面を語っても仕方がないというお話でしたが、そういった考え方の部分にもう手を入れられないかと思いました。

<森委員>

はい、先ほど神野部会長のお話に、観光を担う企業が活躍できる条件整備について、地域ごとに様々な顔があって、良い所を見つけて伸ばすことが大事だということがありました。

地域ごとの顔、内在しているものを伸ばして良いものにする。その内在しているものをどうやって探すのかとなると、やはりお客様の声、お客様にヒアリングをしたりマーケティングをしたり、来ていただいたお客様が一番わかっているしやいますので、お客様からお話をしっかり聞くこと。

そしてこれからの宿泊税、観光税の話になりますと、お客様方からいただいたお金でするので、そのお客様たちが素敵だと思っているところを伸ばすことに使うのが一番大事だなと思っています。

国や県はいろいろな制度、補助金を出しますが、しっかりと的を射たものはあまり無いです。遠く離れた所で考えたものなので、内在しているものをわかっている人たちがしっかりと使い道も考えていかないといけない。この観光税、宿泊税の使い道はしっかり地域に降ろしてやっていくのが大事だと。使い方に関しては地域のお客様の声を聴い

て、払っていただいた方の満足に繋げるようなものにやっていけるといいと思いますし、先駆けて他県で行われているものがあまりそれに合っていないというのを強く感じています。以上です。

<小林委員>

さきほど、人材不足の話がありました。長野県にはこれだけいい観光資源があり、世界から人が来ていることをに対応するには、今の観光に携わる人材を育てるようなところがあってもいいのではと思っています。

地元の松本大学にも観光ホスピタリティ学科がありますが、専門的なことを学んだ人材を地域に輩出して、その人たちが担い手になるという循環になればいいです。

県外や海外に学びに行ってしまうとなかなか地元に戻ってこない。そういうこともありますので、調理師もそうかもしれませんが、専門的なこと、色々な資格を取ることができる場が地元であって、地元として育てていくことがあってもいいのではないかと。今観光の現場を支えられている方はどちらかといえば他の地域から来られて住み付いている人ですが、地元で育った人材が外に発信していこうという力もある程度必要かと思っています。

地元の我々はこんな自然があるのだから黙っていても他地域から来てくれるよう、そんな昔の発想をいまだに持っているかもしれませんが、これから観光産業を県の柱に育にしていくのであれば、地元で人を育てていくことも長い目で行けば必要か思いました。

<神野部会長>

スウェーデンなどでは観光全体をマネジメントする機能、そういったことをサポートする機関が政府にありますので、さきほど矢ヶ崎委員のご意見にあった長野の各観光地を歩いて旅する時の物語性のような、物語を追って旅をするルートがあることやストーリー性がないと、さきほどあった地域を巡回するような動きは中々でてこないかと思えます。そういった物語性は単独の地域だけではなく、地域と地域を結びつけるという点で県であったり、少し上のマネジメント組織の重要な役割か思います。さきほどの条件整備の一つとして、つまりハードだけでなくソフトもあるということです。

<峯村委員>

新たな観光振興財源、税という形になるかもしれないですが、長野県には森林税という県税があり、森林の整備という明確な目的があるので、皆さん気持ちよく協力してくれています。観光税のような新たな財源も、負担者の皆さんが「なるほど、こういうことを目的にしているのであればもっと出したいくらい」と思ってもらえるような思想や将来展望が大事な要素だと思います。

長野県が内輪で抱えている問題を解決していく必要性もありますが、どちらかといえばこの財源を生かしてこういう観光地にしていきたいのだという、願わくば県が音頭を取って色々と考えていただき、県内市町村も取り組みによってはメリットがあること、そのようなコンセプトを示すために、目的を持った財源として、使途に関しては真剣に議論をしたらどうかと思っています。

<神野部会長>

はい、ありがとうございます。

森委員のご発言で、チロルのあるオーストリアやスイスは地方自治の発達した地域ですね。ガルブレイスという有名な学者が『不確実性の時代』の「観客スポーツとしての政治」という章中で書いていることですが、スイスなどは何か問題が起きた時に自分たちで解決しなくてははいけないと思われているそうです。

ガルブレイスはアメリカの民主主義、アメリカの政治を批判する時、スイスを例に出すのですが、アメリカで何か問題が起きると、アメリカ国民は「どこかに良いリーダーは居ないか」というふうに探し回る。つまり、アメリカ人は政治を観客スポーツとして見ているのに過ぎないのだけで、スイスの政治は違うと。スイスはタウンミーティングを通じて直接政治をやっているもの、とにかく自分たちで考えなくてははいけない。「スイスではリーダーシップという言葉聞いたことがない」と書いているのです。先ほどの委員のご発言にありましたが、何か問題が起きた時に「外からの人が需要を捕まえる」というのも同じことです。どういう問題を自分たちの問題として把握し、その問題をどうやって解決していくのかということ自分たちで考えよう、どうやっていったらいいのかなかなか難しいのですが、私は何か手を加えるよりも、自然発生的にそうなるように自治体や政府がサポートをするのがいいのではないかと思います。

こういったことを徹底しているのが鳥取県の智頭町です。智頭町は観光でも成功している訳ですが、智頭町がやっているのは、畑を耕す段階、種を蒔く段階に自治体は口を出してはいけないと。芽が出てきてから「この芽は伸ばすべきだったら補助金を出そう」と言っているのです。

国や県の制度や補助制度が地域に必要性に合っていないという話ですが、全国统一した補助金が出来てしまうとそれに合わせるようになります。補助金の仕組みに合わせてやらなくてははいけないので、地域の必要な部分にどうやって補助金を取るために合わせたらいいのかと考えなくてははいけないので、それは違うのではというご指摘だったと思います。

社会的環境づくりを含めてのことだと思いますので、私の感じるところでは、東京などの都会と比べると、長野県のような地域は、自分たちの考えで物事をやっていこうという力がまだ残っているんじゃないかと思います。自然環境と同じです。

<森委員>

人材の育成という話で学校の例も出ましたが、今居る人たちが育つ、自分で育つためには一番に必要なのは責任だと思います。

責任をもって仕事をすることによって人は育つ。そこにきちんと予算の付いた仕事がある。そのことによって人は育つと思います。

自分の事として考えるのは責任がないとできないので、一人一人が責任を持ったことができるように、そういう責任を地域の人が持つべき財源にすべきだと思います。

今のスイスとアメリカの話、面白かったです。是非スイス型のというかヨーロッパ型の考え方で、各地域で自分事として考えられるような状況を作るのが必要かと思います。

<神野部会長>

そうですね。開発経済をやっている方々に言わせると、その地域のリーダーというのはその地域が作らないとだめだと。

メシアとか救世主が何処かから現れて来てやるというのではなく、世界的に開発をしながら上手くやっているところは、リーダーもその地域で作っている。

それから今の話で重要というものは教育です。日本の場合は盆栽型の教育です。型にはめて、どういうふうに作っていくのかというと型にはめて、曲がりたくもないのに針金でグーっと曲げていって作る、という教育です。

対して今言われているのが、栽培型です。植物を栽培するように皆さん伸びたいように伸びていきなさいと。そうすればどういう能力が必要なのか、結果としてこの能力が必要だったとかというのは後で分かりますし、それぞれの人間が持っているかけがえのない能力を伸ばさせることができる。植物を栽培するように伸びたいようにするには、教育の役割は肥料をちゃんと与えることです。

余計な虫がついて伸びたくても伸びなくなってしまうのは、条件整備として公共サービスでやるべきことだと言われており、単調な作業をやる人材であれば盆栽型でもいいのかもしれませんが、様々な状況を把握し自らプランを作っていくような人材を揃えたとすれば、どういう人材が必要かわからないけど対応できる人材を育てていくというところから生まれるかと思います。

<金澤委員>

小林さんのご意見とずれるかもしれませんが、私は若い子は外に出すべきだと思います。どうしても長野に過疎が起きるのか、それは魅力がないからであり仕方がないことです。

ただ長野県が世界水準の観光地になれば、外に行った人材も「やっぱ日本良いよね」と言って長野へ帰って来る、それまで待つというパターンも必要だと思います。

世界でこう戦っているとか、世界で勉強するもしくは働く、当然の責任を払うって海外に身を置いていますので、世界水準に変わった意識を長野へ持ち帰って戻ってきてくれた方が長野のためには有効なのではないかと。どうしても教育というと長野県の人には困り込んで外に出さない、困り込むためには職業を与えなければいけないとなりますが、例えば今、思い付きで言いますが、一つの高校の留学制度を出資して、海外のサービス業に人材を出して、長野へ帰ってこなくてもいい、そうやって外へ出ていけるような道筋を作れば、逆に他から入ってくる人も増えてくるはずなので、そのあたりは切り替えてやってほしいと思っています。

<神野部会長>

はい。矢ヶ崎先生いかがですか。

<矢ヶ崎委員>

はい。今のお話、大学にいるものとして真剣に拝聴しておりました。

これから私たちも不確実性の世の中で生きていくというところを肝に据えた上で、今後どういう人材が必要になるか本当にわからない、どういう課題が出てくるのか本当にわからない、そういう世の中で何か課題が出てきた時に驚かずに、できることから着実に対処していけるような、リベラルアーツというのでしょうか、底力のある人材を育てていかななくてはいけないのではないかという思いで日々大学におります。

そういうときに、旅というのは人を成長させます。旅行ということが凄く大事だなということにも再度思い至りました。

また少し話飛ぶかもしれませんが、一番旅行していない人は実は観光業界の方々だったりしないかと。観光業界の方々はお休みをしっかりとることが出来ていない人が多い訳です。

まとまったお休みがないので、まとまった行程の旅行が出来ない。世界からのお客様に対応するためには、ご自身も世界水準の観光地を知り、実際どういうことがおこなわれているのかを肌身感覚でわかっているというようなセンスも凄く大事だと思います。

私がよく存じております、よく頑張っている九州の温泉地の方々は、たまに皆様で東京に出て来られます。単に遊びに来ているのではなく、自分たちのお客さんである東京の方が普段どのような生活をしているかというのをチェックしに来るのです。

何が流行っているのか、それと違うものを自分たちは提供しなければいけないということ、そのような意識で東京に暮らすお客様の日常を見に来るために旅をするという話です。

人材育成に関しては外に出ていくとか旅とか、そういうことも活用できるといいと思いました。

<神野部会長>

峯村委員、どうぞ。

<峯村委員>

少し場違いかもしれませんが、この長野県が大好きで、長野県の魅力をどうやって一緒生み出していけたらよいのか議論をしたいと思っています。

2年半ほど前からスイスの日本商工会議所の会頭のアンドレという方と飯綱町が親しくなり、その方がスイスの方から見た魅力的なものを飯綱町に感じるというのです。

その方のお話を伺っていて感じるのが、スイスは確かに素晴らしい観光地なのですが、その割に食べるものは大したことがないといいます。特に朝飯はひどいものだ。そのような人口400~1,000人くらいの村や町がいっぱいあると。でもそこに暮らしている人は誇りをもって住んでいる。

フランスのノルマンディーに行った時も、そこで訪ねた村の人口350人くらいの村なの村長が、「パリなんかに住んでいる野郎の気持ちがわからない。ここの方がよほど素晴らしい」、と。これは頭をガツンと打たれたようご意見で、そこにどう繋がるかなのです。

私は長野県の人が必要な意味で郷土に自慢を持つこと、自信を持った自分の地域に都会で忙しい人達を迎え入れて、本来の人間に戻してあげてまた帰っていけよと、そうい

うエリアになるのがこの長野県の市町村が目指す方向と。

それには洒落たものもなきゃダメです。

ただ朝飯に10品も15品も並べて、「わあっ」というのはいいのですが、もっと違った意味のおもてなしをするために、この贅を活かしてやりたいこと、そのようなことを是非、世界水準の観光地に向かう世界的な高尚な考え方の贅であってほしいと思います。

<神野部会長>

はい、ありがとうございます。おっしゃる通り、フランスで一番小さな町村の人口は8人です。総人口5,000万人の国に約33,000の市町村があります。ヨーロッパでは市町村の人口が平均で1万人を超える国はありません。

スウェーデンは大合併やって1万を超えるくらいにしたのですが、大きくなると人々の交流は増えますが、暮らしを営む上での結びつきは弱くなります。

税について、これはみんなで出し合って、協力してみんなで助け合って生きていこうねというのが発展して税になります。先程の例と同じかもしれませんが、商議所の会費、その全部に税が乗っかります。商議所の会費と一緒に税を取ってしまいますので、自動的に税を上げてもらうにつれて商議所の会費上がっていきます。それにあまり抵抗はないということだと思います。

はい、ありがとうございます。他にご意見ございますか。

今日は私の司会の不手際でまとまりのない議論になったかもしれませんが、皆さんの意見を相対して、私たちに課されたミッション、課題にどうやって取り組めばいいのかということをご共有していただいたことかと思えます。

次回以降、皆様方の具体的なご意見を頂戴しながら、まとめに入るということになるかと思えます。

今日の結果については事務局の方でまとめていただいて、それを基礎にしながら次回もうちょっと次元を上げた具体的なところでみなさまのご意見を頂戴する論点を提出していただき、皆様方のご意見を頂戴した上で、まとめの段階に入っていければ思っています。

特に委員の皆様方からご発言がなければ、本日の審議はここで終了させていただきませう。事務局に進行戻したいと思えます。

3 閉会

<丸山次長>

はいありがとうございます。神野部会長、他委員の皆様、長時間にわたり貴重なご協議ありがとうございました。

審議会の終了にあたり観光部長の金井からひと言申し上げます。

<金井部長>

皆様長時間にわたりご議論いただきましてありがとうございました。

本日のミッション、本県の強み、あるいは課題について非常に幅広いご議論となりま

した。

この後ご欠席された金子委員、山田委員の方からヒアリングを受けまして、それを全体的にまとめた上でまた事前の皆様方にご覧いただき、次回の会議に繋げていきたいと思っております。

なお、税とのお話が何度か出ていましたが、新たな財源の獲得の手法については、税に限らず、次回お話させていただきたいと思っております。

また資料を事前にお渡しいたしますので、次回も闊達なご議論を賜りますようよろしくお願いいたします。本日は誠にありがとうございました

<丸山次長>

ありがとうございました。以上をもちまして第1回長野県観光振興財源検討部会を締めさせていただきます。ありがとうございました。